

第6話「聞くは一時の恥」

課題	自分が話した後に、相手の反応が良くなかった
ストラテジー	間違っていたかどうか自分から聞く
効果	<ul style="list-style-type: none"> 自分が話した日本語の何が問題だったのか、どう言えばよかったかを知ることができる 自分の日本語が正しいかどうかわからないという不安を解消することができる

<課題>

自分が話した後に、相手の反応が良くなかった



スアンはゴミを出す日を間違っていました。佐々木に正しいゴミの日を教えてもらいました。その後、スアンが「佐々木さんに教えてあげました」と言うと、佐々木は怒ってしまいました。しかし、スアンはどうして佐々木が怒ったのかわかりませんでした。

<ストラテジー使用場面>



スアン: あ、葵さん。

私、何かよくなかったですか。

葵: 佐々木さんに「教えてあげた」じゃなくて、「教えてもらった」って言いたかったんだよね。

<スアンが使ったストラテジー>

間違っていたかどうか自分から聞く



スアンは、怒っている佐々木や笑っている葵の反応を見て、「私が何か変なことを言ったのかもしれない。」と考えました。そこで、葵に「何かよくなかったですか。」と質問しました。すると、葵はスアンが文法を間違えていたことを教えてくれました。

<どんなストラテジー？>

日本語を話しているとき「自分の日本語の文法やことばが正しいかどうか分からない。」と不安に思うときはないでしょうか。話しているときに文法やことばを間違えてしまうことはよくあります。そんなとき、このストラテジーを使って相手に質問をすると、自分の話した日本語のどこが悪くなったのか、どうすればよくなったのかを知ることができます。例えばスアンは葵に質問したおかげで、「～あげます」と「～てもらいます」を間違えていたことに気づきました。このように自分の日本語をふりかえると、「言いたかったこと」と「実際に自分が言ったこと」に違いがあることがわかります。この違いがわかると、「言いたかったこと」を言うために、文法を修正したり、新しいことばや表現を身につけることができるので、日本語のレベルアップにつながります。

そして、葵に質問をしたことによって「何か間違えたかもしれない。」というスアンの不安も解消されました。もし自分が話しているときに不安があるなら、スアンのように相手に質問してみると、その不安を小さくすることができます。ドラマの中でやんすは「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」と言っていました。これは日本のことわざで、「質問することは短い時間恥ずかしいだけだが、質問しないのは長い時間(一生)恥ずかしい気持ちのままだ」という意味です。やんすは、「知らないことやわからないことがあったら、恥ずかしがらずに質問したほうがいい」というメッセージを伝えているんですね。

<どうやって使う？>

「自分の日本語が間違っていたかもしれない。」と思ったときにこのストラテジーが使えます。でも、話しながら自分の日本語に間違いがあるかどうかをチェックすることは簡単ではありません。スアンは佐々木が怒っている様子や葵が笑っている様子を見て「何か間違えたかもしれない。」と思いました。つまり、スアンは自分で自分の日本語をチェックすることはできませんでしたが、話した後の佐々木と葵の様子から自分の日本語に問題があったと予想したのです。このように、相手の反応も自分の日本語をチェックするきっかけになります。

自分の日本語に問題があるとわかって、どう直せばいいかを自分で考えてもわからないときは、スアンのように、「何かよくなかったですか。」と他の人に質問すると、相手からもっといいことばや表現などを教えてもらえます。

<もう一歩> 質問しないと教えてくれない？

「外国語を話しているときに間違いがあったらすぐに教えてほしい。」と思う人も多いのではないのでしょうか。でも、日本語を話しているとき、いつも周りの人が「あなたの日本語は間違っている。●●と言ったほうがいい。」と教えてくれるわけではありません。「あなたの日本語は間違っている。」と指摘すると相手が嫌な気持ちになるかもしれないと思っている人がいるからです。

もしストラテジーを使って「何かよくなかったですか。」と質問すると、「よくなかったところを教えてください！」という気持ちが相手に伝わって、相手もアドバイスをしやすくなります。自分の日本語に自信がないときは、積極的に質問してみましょう！